

『子どもとの関わりを大切に』

字が書ける、数がわかるなどIQなどで図れる力を「認知能力」、IQなどで測れない内面の力を「非認知能力」といいます。最近になって、非認知能力を身につけさせることの重要性がとなえられています。特に幼児期に身につけた能力の基礎が、その人間の一生を左右するというのです。まさに「鉄は熱いうちに打て」ということなのです。

非認知能力とは、例えば、目標に向かって頑張る力、他の人とうまく関わる力、感情をコントロールする力、また、IQに関係なく、意欲、協調性、粘り強さ、忍耐力、計画性などの個人の特性ともいえます。

この非認知能力が注目を浴びた背景には、2000年にノーベル経済学賞を受賞した教育経済学者のジェームズ・ヘックマンさんの代表的な研究「ペリー就学前プロジェクト」があります。この研究は、アメリカのミシガン州で行われ、1960年代からはじまり、現在まで続くといわれる調査によるものです。

ヘックマンさんは、子どもの教育に国が公共政策としてお金を使うなら、就学前の幼児期がとても効果的だということと、幼少期に非認知能力を身につけておくことが、大人になってからの幸せや経済的な安定につながるということを主張しています。

研究の調査の対象は、経済的に余裕がなく幼児教育を受けることができない貧困世帯の3～4歳の子どもたち123人です。子の中のおよそ半数の子どもに、週3回、1日3時間のプリスクールに2年間通ってもらいました。さらに週に一度、教師による家庭訪問も行いました。プリスクールに通ったグループと通わなかったグループのその後の人生にどんな変化が起こるのか追跡調査をしたところ、40歳の時点で明らかな違いが現れました。プリスクールに通ったグループは、通わなかったグループに比べて、収入が多い、持ち家率が高い、学歴が高いなどの差が見られたのです。ヘックマンさんは、彼らが大人になってからもより幸せでいられるのは、プリスクールに通って認知的な能力を伸ばしたからではなく、認知的な能力以外（非認知的能力）を身につけたことが大きな要因ではないかと考えたのです。

非認知能力が大事だというのは、うまくいかないときに諦めずに「どうしてだろう」「こうやってみよう」「これがだめなら、ああやってみよう」など、あくまで目標の達成まで粘り強く頑張る姿勢を身につけることです。我慢すること、感情をコントロールする力なども大事です。それを身につけるためには、子どもの自発的な部分を大事にし、幼児期の場合は主体の遊びが鍵を握ります。夢中になって遊びこむ中で、やる気、意欲、粘り強さ、探求していく力が身についていくといわれています。

家庭で子どもの非認知能力を育てる具体的な例としては、

○毎日の絵本の読み聞かせが効果的

重要なのは、途中で簡単な質問を入れること

「どうして〇〇さんは泣いたの?」、「さっきリンゴを持っていったのは誰?」などこれにより、語彙力、共感性、想像力、知的好奇心などが養われる。また、ワーキングメモリ（短期記憶）などの知的能力も伸びる。

○遊具や道具がなくても自由に遊ばせること（自然に触れながら遊ぶことはより効果的）

異年齢の子との遊びも大切、協調性、創意工夫、忍耐力や交渉力、人間関係の調整力感情コントロールなどが鍛えられる。

○毎日座って集中する時間を設定すること

ドリルでもお絵かきでもよく、大切なのは親も一緒に座って勉強すること

そうした時間が習慣となれば、忍耐力、集中力、計画性の基礎が養われる。

○絵をかかせる（自由にかかせる、模写、デッサンなど）

かいた後に、「なぜそれをかいたの?」「工夫したことは?」「どこにこだわったのか」などを正しい言葉遣いで説明するように促す。自己認識、自己感情のコントロール表現力などを身につけられる。

○正しい言葉遣いができるようにすること

「ママ、水!」では通じないことを教える。「ママは水でないのよ」

略さず最後まできちんと話すように繰り返してしつけること。けじめを大切に

ソーシャルスキル、誠実性や協調性が養われる。親の生活態度も大事

○子どもの持ち物の管理を自分でさせる

おもちゃなどの整理と片付け、簡単な掃除の習慣を身につけさせる。できない場合はそれなりのルールに従わせる。年齢による程度の度合いがあるが、5～6歳ならきちんと管理できるようになる。また、いつそうするのかという時間の約束も自分で決めさせる。「早くしなさい」「片付けなさい」というよりも、何時何分にするという予定を自ら決め実行するように、責任感、計画性が養われる。

○喧嘩など、危険がない場合はできるだけ大人は介入せずに、事後処置を心がけること

自己解決ができないときや、正当性を主張できないとき、自分の過ちを認められないときなど、相手の立場になってみると、どんな態度や言葉がきつく感じるかなど味わわせたり、反省させたりなど、本人なりの解決法や感情処理の方法を考えさせる。

感情コントロールや対人スキルを学ぶことにつながる。

○子どもがチャレンジしたことの結果よりもその過程を褒めること

その頑張りや取組を賞賛してあげることによって自己肯定力を身につけ、やがて逆境に負けない心が育つことになる。

これらは、あくまで一例にすぎませんが、幼少期の子たちが成長できる時間はあっという間に過ぎてしまいます。期を逃さない子どもとの関わりがとても大事ですね。

